

平成 23 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720231
 研究課題名 (和文) 南部アフリカにおける開発政策と先住民運動にともなう狩猟採集社会の再編に関する研究
 研究課題名 (英文) Social Impacts of Development Programme and Indigenous Peoples Movement on San Hunter Gatherer Societies in Southern Africa
 研究代表者
 丸山淳子 (Maruyama Junko)
 京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・助教
 研究者番号：00444472

研究成果の概要 (和文)：

本研究は南部アフリカの狩猟採集民として知られるサンが、再定住をともなう開発政策と先住民運動の渦中で、自らの社会や文化を再編する過程を明らかにしたものである。サンの政治参加、「伝統文化」活動、アイデンティティと社会関係などを調査した結果、「文化の消滅」の場となるのが危惧されていた再定住地が、むしろこの社会や文化の特徴が再編されつつ維持、再生産される場となっていることが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：

This study elucidated that the social impacts of resettlement programme and indigenous peoples' movement on San hunter gatherers in Botswana. As a result of research on micro politics, cultural activities, identities and social relationships among the resettled San, it was found that they made an attempt to convert the new resettlement site into multifaceted social spaces that they can live with.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	570,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：南部アフリカ 狩猟採集社会 再定住 政治参加 文化活動 アイデンティティ
 土地利用 相互扶助

1. 研究開始当初の背景

今日、ボツワナ共和国のサンの多くが、従来の生活域を離れ、開発計画の拠点として政府が設けた再定住地で生活をしている。この再定住をともなう開発政策は、サンの「脱狩猟採集民化」と主流社会への同化をはかる意

図があると批判され、「周辺化されたマイノリティ」をめぐる権力関係の不均衡や政策の是非といったテーマとの関連で議論されてきたが、新たな環境でサンが営む日常生活は等閑視される傾向にあった。

これに対して、研究代表者は、ボツワナの

再定住地においてサンが日常生活をどのように組織し理解しているかに焦点をおいて調査を続けてきた。そのなかで、再定住地が単に「政府に押し付けられた場」となっているのではなく、散在していた小規模集団が結集し、サンの社会秩序が守られる大規模なサン・コミュニティを生み出している可能性や、そうした動きと世界的に活発化している先住民運動の関係性について検討する必要があると考えるにいたった。

2. 研究の目的

本研究では、再定住地をサンの文化や社会の再生産や再構築に貢献する場としてとらえ、そこでサンが独自の価値観や生活システムの維持、再編する過程を検討することを目的とした。そのために以下の4つの目的を定めた。

(1)再定住後に活発化したサンの政治参加がどのように進行し、従来の平等的な価値観と折り合いがつけられているのかを明らかにする。

(2)再定住地において先住民支援NGOが支援、提供するようになった文化事業との関連のなかで、サンの「伝統的な文化活動」がどのように進められ、文化の活性化や再構築に寄与しているのかを明らかにする。

(3)再定住地に誕生した混住状態のなかで、出身地域ごとの帰属意識や「先住民サン」としてのアイデンティティがどのように展開され、社会関係を再構築しているのかを明らかにする。

(4)調査の進行と同時に、再定住地のコミュニティ、ボツワナの行政、NGO、研究者らと再定住地におけるサンの文化や社会の持続性に関して議論の機会をもうけ、これらのアクター間の将来の協働について模索する

3. 研究の方法

ボツワナのハンツィ・ディストリクトにおいて、サンが暮らす再定住地を調査地として、現地語を用いた聞き取りや長期的な参与観察などによるフィールドワークを実施した。またボツワナ大学図書館、公文書館、関連NGOなどでも文書資料を収集し、それら进行分析した。さらに大学、行政、NGOなどのスタッフとも定期的に意見交換の場を設けた。

4. 研究成果

(1)再定住地では政治的代表者の選出が多くの住民の関心事となっており、選出過程においては候補者の性、年齢、実務能力に加えて、歴史的な出来事や系譜関係などが盛んに議論されていることがわかった。そのなかでも選出基準としてもっとも頻繁に参照されていたのが、近隣のバントゥ系農牧民バカラハリとの系譜関係の有無であった。もともと

この地域のサンはバカラハリと通婚関係にあり、相互交渉も盛んであったが、近年になって、政治的代表者の正統性として、バカラハリとの系譜関係があることが重要視され始めていた。

サンとバカラハリの両義的な存在である政治的代表者は、国家や国際社会に対してはサンとしてその代表者になり、住民のあいだではバカラハリとみなされ、平等的なサン社会の外側へと押し出されることによってそうした地位に就くことが合意された。こうして政治参加の実現と平等的な感情のあいだの矛盾の解決を導こうとしている一方で、同じサンとされてきた人びとのあいだで、サンよりもバカラハリを上位とする「民族の序列構造」が再生産される可能性も示唆された。

(2)先住民運動の高まりとともに誕生したNGOが主導して、サンの工芸品や踊り、歌などが「伝統文化」として再定置され、再定住地が、こうした文化活動の活動拠点にもなっていることが明らかになった。こうしたNGOの動きは、サンの狩猟採集活動を積極的に評価し、ときに単純化、本質化しながら消費可能なかたちで商品化、産業化することによって、サンを「再狩猟採集民化」しようとするものともいえる。

工芸品を製作・販売したり、踊りや歌のグループを結成し各地でそれを披露するようになった人びとは、こうした活動をとおして他地域のサンとの連携を強化したり、サンに独自の文化を見直そうとする新しい動きにも参与していった。しかし同時に彼らは、開発政策が「脱狩猟採集民化」をねらって導入した工事現場での賃労働や現金収入源創出プロジェクト、商店や酒場の経営といった新たな経済活動にも従事していることが多かった。再定住地における経済、文化活動は、「脱狩猟採集民化」「再狩猟採集民化」という相反する外部からの働きかけの双方を組み合わせることによって実践されていることが解明された。

(3)ひとつの再定住地に同じサンとして集められた人びとのあいだでは、出自や出身域などへの帰属意識が強まり、またそれを基にした差異化も進んでいることが明らかになった。たとえば割り当てられた居住用プロットが隣接している住民どうしでも、再定住以前に共住経験がなければ相互扶助関係が築かれなかったり、再定住地の周囲に自発的につくられた小規模な居住地は、出身域の位置関係を反映した配置になっていたり、再定住以前からあった差異が強調される社会状況が生まれていた。そして社会関係の不連続性が、出身地や出自の違いを根拠に説明されたり、その境界を強調するような言説も頻繁

に聞かれることがわかった。

一方で、先住民運動を通して活発化したサンのための NGO の組織化や他地域に暮らすサンとのネットワーク形成を積極的に担った一部の人のあいだでは、「サン」としてのアイデンティティが強調されることが多かった。しかし、それが、彼ら以外の大多数に共有されていくのか否かについては、今後の課題として継続的に検討していく必要がある。

以上の3点は、再定住地においてサン自身が開発政策と先住民運動の双方に関わりながら、自らの文化や社会を再構築している過程を詳細なデータに基づいて明らかにしたものである。これまで再定住地は開発政策がサンの国民化を半ば強制的に進めるための場としてしか描かれてこなかったが、これらの調査結果から、再定住地で生じているのは単なる「文化の消滅」ではなく、内部に分裂や対立の可能性を含みながらも、従来のこの社会の特徴が再編されつつ維持されており、変化のなかに連続性が明確に認められることがわかった。

(4)ボツワナ大学で研究者らとセミナーを開催し、サン研究者以外にも広くサンが置かれている状況を伝えるとともに、ボツワナにおける少数者の文化の維持について議論を交わした。また最終年には、他のサン研究者らと協同で、調査成果を百科事典形式でまとめて発行し、それをもとに再定住地において住民や政府関係者、NGOスタッフらと意見を交換し、今後、研究成果を現地で活用するための方法とその課題を検討した。これらは、研究者による調査成果の還元のひとつのあり方としても評価された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

丸山淳子 2010 『『サウス・アフリカ』に続く道：ボツワナのブッシュマンと南アフリカ』 峯陽一編 『南アフリカを知るための60章』 明石書店 査読無 pp335-339

丸山淳子 2009 「開発政策によるサンの集住化と脱狩猟採集民化：経済格差と食物分配に注目して」 岸上伸啓編 『開発と先住民』 明石書店 pp232-253 査読有

丸山淳子 2009 「開発政策と先住民運動のはざままで：ボツワナの再定住地におけるサンの居住形態の再編」 窪田幸子・野林厚志編 『「先住民」とはだれか?』 世界思想社 pp224-247 査読有

丸山淳子 2008 「政治論争にまきこまれる：

ボツワナ共和国における開発政策と先住民運動の渦中で」 武田丈・亀井伸孝編 『アクション別フィールドワーク入門』 世界思想社 pp63-75 査読無

丸山淳子 2007 『『国民』と『先住民』のはざままで—ボツワナの再定住地におけるサンのヘッドマン選出をめぐるマイクロ・ポリティクス』 『アジア・アフリカ地域研究』6(2) p.373-395 査読有

Maruyama, Junko 2007 “Creating New ‘Homes’ on the Outskirts of the Resettlement Site: Alternative Settlement Behavior among the Resettled San Hunter-Gathers” Maruyama, Junko, Liulan Wang, Tatsuro Fujikura and Masako Ito eds. 2006 *Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa* Kyoto: ASAFAS and CSEAS Kyoto University 査読無

[学会発表] (計11件)

丸山淳子 「移転先に「故郷」をつくる：南部アフリカ狩猟採集民サンの居住形態と食物分配の変化」 京都人類学研究会シンポジウム 京都大学 2009年12月26日

Maruyama, Junko “Development Program and Indigenous Peoples’ Movement: The Experiences of the San in Botswana” International Workshop “The Limits to the Recognition of Distinctive Rights for Indigenous People”, CAERP and the School of Archeology and Anthology of Australian National University, Canberra, Australia 2009年8月21日

丸山淳子 「セントラル・カラハリ地域における先住民運動の展開」 日本アフリカ学会第46回学術大会 東京農業大学 2009年5月24日

丸山淳子 「エランドの肉も、牛のミルクも：多様化するサンの生計維持活動」 国立民族学博物館共同研究会『生業と生産の社会的布置』 国立民族学博物館 2009年3月15日

Maruyama, Junko “Development, Nature Conservation and Indigenous Peoples Movement: The Experiences of the Bushmen in Botswana” International Workshop “Biological Conservation and Local Community’s Needs: Lessons from Field Studies on Nature-Dependent Societies” Chambre de l’Agriculture, Yaounde, Cameroon 2009年2月7日

丸山淳子 「ポスト狩猟採集社会への移行に関する研究—ボツワナにおけるサンの再定住と社会関係の再編」 2008年度第1回近畿地区研究懇談会(博士論文発表会) 京都大学 2008年6月21日

丸山淳子 「開発政策と先住民運動のはざままで：ボツワナの再定住地に暮らすサンの事例から」 日本文化人類学会第42回研究大会 京都大学 2008年6月1日

Maruyama, Junko “The Dynamics of Contemporary Livelihood and Social Relationships among the |Gui and |Gana San in Botswana” Department of African Languages and Literature Seminar, University of Botswana 2008年2月22日

丸山淳子 「開発政策と先住民運動のはざまで：再定住地に暮らすセントラル・カラハリ・サンの生活から [2]」 国立民族学博物館共同研究会『「先住民」とはだれか？—先住民族イデオロギーの潜勢的／顕在的形態とその社会歴史的背景に関する研究』 国立民族学博物館 2007年12月22日

丸山淳子 「開発政策とマイノリティ：セントラル・カラハリ・ゲーム・リザーブにおけるサンの再定住問題」 ワークショップ「アフリカの平和力」 2007年6月17日

丸山淳子 「再定住地におけるサンの生業と生産の社会的布置：開発計画と先住民運動に着目して」 国立民族学博物館共同研究会『生業と生産の社会的布置』 国立民族学博物館 2007年6月10日

[図書] (計2件)

丸山淳子 2010 『変化を生きぬくブッシュマン：ポスト狩猟採集社会の民族誌』 世界思想社

Maruyama, Junko, Liulan Wang, Tatsuro Fujikura and Masako Ito eds. 2006 *Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa* Kyoto: ASAFAS and CSEAS Kyoto University

[その他]

□調査成果の現地への還元のための百科事典 Junko Maruyama, 2011 “ancestor”, “cat”, “cattle-raising” “council” “disco” “draught relief program” “headman/headwoman” “horticulture” “Kx’oenshakene” “porridge” “Remote Area Development Programme” “shop” “skill training programme” in Tanaka, Jiro and Sugawara, Kazuyoshi eds. *Encyclopedia of the |Gui and |Gana San*

Tanaka, Jiro. and Maruyama, Junko 2011 “Ghanzi” “ration” “residential pattern” in Tanaka, Jiro and Sugawara, Kazuyoshi eds. *Encyclopedia of the |Gui and |Gana San*

□アウトリーチ活動：特定非営利活動法人アフリック・アフリカ <http://afrik-africa.vis.ne.jp/>
≫講演活動「アフリカ先生」プロジェクト
公開講座「アフリカの環境保全と開発—人類学・地域研究の視点から」（法政大学人間環境学セミナー） 2008年11月15日、22日
アフリカ理解講座「アフリカの言葉を話そう」（京都府国際センター／NPO 法人アフリ

ック・アフリカ） 2008年10月4日
特別授業「いまづ環境学公開講座 2007」（兵庫県立西宮今津高等学校生物 I B, 生物 II） 2007年10月16日

≫ウェブ・エッセイ

「ねだり、ねだられ生きていく」『日々のアフリカ：ねだり編』 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2009年9月

「書くことと書かないこと」『日々のアフリカ：書く編』 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2009年2月

「トイレは、きれいなんかじゃない」『日々のアフリカ：トイレ編』 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2008年4月

「見えないけど、一緒にいる：カラハリケータイ談義」『日々のアフリカ：携帯電話編』 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2008年2月

「ダンスが生み出す女たちの絆」『日々のアフリカ：ダンス編』 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2007年10月

「揚げたてのドーナツ」 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2007年8月

「正しい口説き方」『日々のアフリカ：恋愛編』 特定非営利活動法人アフリック・アフリカ ホームページ 2007年3月

□取材：「京都発 サル学の60年 第3部 人の生態を見つめ “定住化 分かち合う心は今も”」 京都新聞 2008年2月28日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山淳子 (Maruyama Junko)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・助教

研究者番号：00444472

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：